

随

想

人は人との かかわりの中で 考えを変える

2011年、NHKの教育テレビで、タレントと学識者が週代わりに出演する番組があった。タレントは、今までの人生を振り返り、生き方に強い疑問や迷いを抱えており、その疑問に対し学術的に取り組んできた学識者が、疑問や迷いにどう向き合えばよいのか、道筋を提示するという構成であった。何回目かの放送で、「運が悪い」ということに対し、学識者が「我々は普段、たくさんの幸運に恵まれているのに、誰もそれを実感することはない、特に悪いことが起きたときだけ運が悪いと言う」このようなことを話していた。このことを自分に置き換えて考えてみてもやはり同じで、困り果て、自分ではどうしようもなくなると、はじめて「聞く耳」を持つ。「聞く耳」を持つには、自信の喪失が少なからず必要のようだ。

愛知淑徳で25年、理科の授業を担当。私が授業をする上で心掛けていることは、概念の学習であれ理論の学習であれ、有意味なものは決して伝達されるのではなく、学習者の内面で構成されるとする構成主義の考えだ。学

習者は授業で学ぶ前から科学理論とは異なる様々なアイデアを持っているので、授業は概念形成をするというより、既存の概念から科学概念への転換を促すものといえる。シミュールの言語理論などもこれを支持しており、授業におけるコミュニケーションの本質を理解し、いかにして生徒自身に正しい科学理論を構成させるか、その具体的な方法について考えなければならぬ。授業は社会的過程であるから、生徒たちは、他の生徒や教師とのかかわりの中で考えを変える。授業内での人と人とのかかわりをうまく利用して、生徒たちに自信を喪失させつつ「聞く耳」を持たす努力は、まだしばらく続きそうだ。

